

# 「われら」の呼びかけ

心光寺住職 宮岳文隆

(2018年5月26日、大分県由布市光泉寺で4人の僧侶が高座形式で話した「光泉寺説教大会」において、宮岳文隆が話した法話の記録です)

【讃題】「生死しょうじの苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば  
弥陀みだくぜい弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける」

(『真宗聖典』四九〇頁)

## なぜ頭が下がったのか

ただ今ご讃題として唱えさせていただきましたのは、親鸞聖人がお書きになられました『高僧和讃』の中の龍樹菩薩についてのご和讃です。このご和讃について、忘れられない話を以前、佐野明弘先生から聞かせていただいたことがあります。

昔は説教師というのは、今でも落語家がそうであるように、師匠について修業しなければ一人前の説教師にはなれなかったそうです。まだ二十歳前の若い頃から、お師匠さんについて、随行しながら師の説教の前講を勤めて、後で師から色々と厳しい指導を受けるわけです。

昔、そのようにして修業中の若い坊さんがおられまして、師匠の前で前講を勤められたそうです。その時のご讃題が、先ほど私が讃題として唱えました「生死の苦海」のご和讃だったそうです。ところが、その若坊さん、高座にあがりますと、お師匠さんが真下から厳しい目で見つめているものですから、すっかり上がってしまいまして、「生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば」と、最初の二句までは唱えたのですが、後に続く後半の二句がすっかり頭から飛んでしまいましてどうしても出てこない。アワを食って一生懸命に思い出そうとするのですが、どうしても出てこない。仕方がないから、また最初に戻って唱え直してみた。「生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば」。しかし今度もまたそこで詰まってしまう。目の前ではお師匠さんが、「何だどうしたんだ」と恐い顔で見上げている。そうすると増々あせってしまって、また最初から唱え直す。「生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば」。こうしてその若坊さんは、全身から油汗を流しながら、ちょうど今田んぼで蛙が一晩中鳴いていますが、それと同じように、何度も何度も「生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば」と、この前半の二句ばかり繰り返したそうです。

さてお師匠さんの方ですが、最初は「何だどうしたんだ。『弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける』ではないか」と、弟子のふがいなさを心の中で叱りながら見上げておったそうです。ところがその内に、どうしたわけか段々と頭が下がってきまして、とうとう最後には下を向いてナンマンダブツ、ナンマンダブツと、小さな声でお念仏を称え始めたそうです。

本当にあった話しかどうかはわかりません。しかしこの話を聞いたのは、もう十年以上も前のことですが、ずっと心に残っていまして、今も折に触れて思い出さずにはおれないのです。そのお師匠さんは、最初は咎める思いで弟子を見上げていたのに、どうして段々頭がさがってきて、最後はお念仏を称え始めたのでしょうか。私はそのことを考えるのです。まあ一つの問いを与えられたようなものです。皆さん方も、なぜだろうかと考えてみてください。

今の所私が気づかせていただいている所を申し上げますと、お師匠さんは、最初は弟子を育てる師匠として、「何だどうしたんだ。次は『弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける』ではないか。忘れたのか」と、叱る心しかなかったのでしょうか。しかし弟子が油汗を流しながら、何度も何度も「生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば」と繰り返す言葉を聞いているうちに、次第にそのご和讃のお言葉が、お師匠さん自身に、阿弥陀仏が直接呼びかける声として届いてきたのではないのでしょうか。

ということは、おそらくそのお師匠さんには、その時何か「生死の苦海」と親鸞聖人がおっしゃっておられたような苦しい問題を、抱えておられたのではないかと思うのです。子供さんを亡くされたのかもしれませんが。あるいは、今私の知り合いの方が、子供さんが心の病を抱えて入院中で、とても辛い思いをされています。何かそういう問題を抱えておられたのかもわかりません。かく言う私も、実は家庭内に色々な問題を抱えていまして、悩みはなかなか絶えません。

私の家では朝日新聞を取っていますが、その朝日新聞に「悩みのるつぼ」というコーナーがあって、毎週土曜日に掲載されています。今日も載っております。「悩みのるつぼ」という名前はよく付けたものだなと思います。私は、それを数年前から毎回切り抜いて取っていますが、数年になりますと、もうだいぶ厚くなっています。今そのタイトルだけを見返してみましても、性格のことあり、病気のことあり、家庭内の人間関係のことあり、大事な人を亡くされた苦しみありと、様々です。いずれも小説のような作り話ではなくて、実際に今苦しんでおられる方々の生の声ばかりです。まさにこの世は「悩みのるつぼ」だなあと思わざるをえません。

おそらく、そのお師匠さんも、そのような悩みのるつぼの中におられたのではないかと思うのです。だからこそ、最初は師匠として、ご和讃の言葉を、あたかも教科書の言葉のように思って、「何だ、それ位のことを覚えられないのか」と

弟子を責めていたのですが、その内に段々と、お弟子が何度も繰り返すご和讃の言葉が、自分自身に法蔵菩薩が直接呼びかける声として届いてきて、油汗を流しながら、何度も何度も「生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば」と呼びかける弟子の声に、頭がさがり、ナンマンダブツ、ナンマンダブツとお念仏が口から出始めたのではなかろうかと思えます。

## 「われら」の呼びかけに救われる

「<sup>しょうじ</sup>生死の苦海」。生死<sup>しょうじ</sup>というのは現代語では「せいし」と呼んで、「<sup>せいし</sup>生死の境をさ迷う」と言う言葉がありますように、生きること、死ぬことというほどの意味です。しかし元々は仏教の言葉で、<sup>しょうじるてん</sup>生死流転<sup>しょうじ</sup>とあって、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上という六道輪廻の迷いを、果てしない昔から経めぐっていることを言うのです。それを苦しみの海に譬えています。「生死の苦海ほとりなし」—生死流転の迷いの海は、果てしなく、また底なしの深さを持っている広大な海のようなものだ。「ひさしくしずめるわれらをば」—その広大な迷いの海の中を、この私は、はるかな昔から、浮きつ沈みつしながら、生れ変わり死に変わりしてきた。そして、今人間に生まれてきて、こうして色々な問題を抱えながら、もがき苦しんでいる。「ひさしく」というのは、無始の昔から、つまり、いつ始まったのかわからないはるかな昔からということです。気が付いた時には、もうすでにそうなっているということです。

こういうことは、自分の頭で考えた言葉ではありません。自分では、とてもそんなことは思えるものではありません。仏さまから呼びかけられて始めて、「ああほんとうにそうだなあ、まちがいないなあ」と頷いた言葉です。言い換えれば、仏さまの呼びかけの声の中に見出された自分自身の姿です。ですから、この頷きは、もうすでにそのまま、仏さまの呼び声の中に受け止められておる姿なのです。

しかも、「ひさしくしずめるわれら」と、そういうふう<sup>しょうじ</sup>に苦の海に漂っている衆生を、「われら」と、ずーっと受け止め続け、名告りをあげ続けておってくださる声です。

私は、常々思うのですが、「われら」という言葉は、不思議な言葉ですね。「我々」という言葉とは、響きが全然違います。昔、私が学生の頃、全共闘の人たちが集会の場で演説をする時、必ず「我々は—」と言っていたのを思い出します。数を頼んで他に対抗する気持ちがあらわれています。ところが、親鸞聖人はご著作の中に「われら」という言葉を、実に四十四カ所も使われているのですが、いずれの場合も、そういう感じとは明らかに違います。

金子大栄という先生は、この「われら」という言葉について、「ら」をわれとする言葉だと言われています。「ら」をわれとするとはどういうことでしょうか。「ら」というのは個人ではないことです。そこに自分だけではなく、同じ境遇を抱えた多くの仲間がいるということです。佐野明弘先生は、「ら」は身をあらわすと言われていました。身とは宿業の身ということでしょう。つまり「ら」は、宿業の身を抱えて苦しみながら生きている多くの仲間がいるということであらわしています。その仲間をわれとする。そこに共同体を感じ、その共同体を我として生きよう。運命を共にしていこうと、そういう決意、主体的な選びがあらわれています。それが「われら」という言葉です。

大事なことは、自分自身もその一員だということです。 他人事だったら「われら」とは言いません。「かれら」です。このご和讃の「われら」を、「かれら」と言い換えてみたらどうでしょうか。「生死の苦海 ほとりなし ひさしくしずめる かれらをば」。突き離れた冷たい言葉になりますね。仏さんは、特に法蔵菩薩という仏さまは、どんな人に対しても「われら」と呼ばれるのです。決して「かれら」とは言われません。これは大変なことです。

ちょっと試してみたらすぐにわかります。この間オウム真理教の一連の裁判が終了しましたね。麻原彰晃をはじめ十三人の死刑が確定しました。この十三人の死刑囚を「われら」と言えますか。どうでしょうか。「かれら」ではありませんか。「自業自得だ。早く死刑になればいいのに」と。今自己責任という言葉がよく聞かれるでしょう。あれも「かれら」という意識から出ている言葉です。ですから、「われら」という言葉は、本当に凄惨な言葉です。法蔵菩薩にしか言えない言葉です。法蔵菩薩はどんな人に対しても、そこに自分自身をご覧になられて、「われら」と呼ばれるのです。私どもは、自分が本当に苦しい時に、このような呼びかけに出遇ったら、もうそれだけで救われるのです。

このお師匠さんも、恐らくそうだったのではないかと思うのです。何か抜き差しならぬ苦しい問題を抱えておられたのでしょうか。そのお師匠さんに、「生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば」という法蔵菩薩の声が聞こえてきたのです。「そこに私は居るよ」と。「そこで私はあなたを待っておるよ」「ずっと一つと久遠の昔からそこであなたを待ち続けておるのですよ」「そこには、同じような問題に苦しんできた多くの先輩や仲間もいるよ」「そして私と一緒にあなたを待ち続けているのですよ」「だから、迷いの身から抜け出せないことを心配せんでもいいよ。安心して、私やみんなの待っている迷いの身に帰って来い。迷いの海に帰って来い。そこがあなたの帰り場所だ。そこがわれらの帰り場所だ」と。

「われら」という呼びかけの中に、そのような温かい呼びかけの声を聞いて、お師匠さんは頭が下がり、お念仏が口をついて出たのでしょうか。

そうすると、「弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける」という後半の二句も、結局、前半の二句に収まっていることがわかります。特に「われら」という呼びかけの言葉の中に収まっていることがわかります。つまり、後半の二句は、この「われら」という法蔵菩薩の呼びかけのお心にほかならなかったのです。「それを私は教科書の言葉のようにして、『何でそんなこと位覚えられないのか』と責めておった。ああ申し訳なかった。今日は弟子のお前から大事なことを教えてもらった。有難う、有難う」と。こういう思いが湧いてきて、頭が下がり、お念仏が口をついて出たのではないかと思います。

真宗の教えの要は、阿弥陀仏によって、特に法蔵菩薩によって、迷いの私が「われら」と呼ばれている。その呼び声が私の心に届いた時、始めて私は迷いの身に安んじて帰ることができる。そこに私の帰り場所が与えられる。そしてそこに、同じく迷いの身を抱えて生きる一切衆生と共なる世界が開かれてくるということです。これを一言で言えば、「法蔵菩薩が私を呼ぶ声が聞こえたら助かる」ということです。お念仏一つで助かるというのは、そういうことです。お念仏というのは、呪文ではなくて、そういう法蔵菩薩の私を呼ぶ声なのです。

## 法蔵菩薩とはどんな仏さまか

ところで、私は先ほどから法蔵菩薩、法蔵菩薩としきりに言っておるのですが、ここで、ちょっと法蔵菩薩のことを説明しておかなければいけないと思います。皆さんは法蔵菩薩という菩薩さんの名前を聞いたことがありますか。どうでしょうか。聞いたことがあるという人は手を上げてみてください。……ほとんどの人は聞いたことがないようですね。でも、皆さん方は、先ほど『正信偈』をあげたでしょう。今までもう何度もあげてきたでしょう。その『正信偈』の最初の二句は「帰命無量寿如来 南無不可思議光」ですね。これは南無阿弥陀仏というインドの言葉を中国語で言い直したものです。ですから『正信偈』の最初の二句は南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と二回お念仏を称えたことになるのです。で、その次の三句目からは、その二回唱えたお念仏のお謂れが述べられてくるのです。その最初は何という句でしょうか。「法蔵菩薩因位時」ですね。ですから法蔵菩薩は、お念仏のお謂れを人間像であらわしたもののなのです。皆さん方は知らないと言われるけど、実は朝晩『正信偈』をあげる時、法蔵菩薩のお名前をちゃんと呼んでおられるのです。にもかかわらず、法蔵菩薩はほとんどの方に知られていません。これは、ある意味で法蔵菩薩の性格をよくあらわしています。法蔵菩薩は、

目立たない菩薩なのです。観音菩薩や地蔵菩薩や、高塚地蔵菩薩（大分県ではご利益の高いことで有名な菩薩）は目立つ菩薩です。法蔵菩薩の場合は、そんな菩薩がおられるということすら、ほとんどの人が知りません。

そういう法蔵菩薩のことを、曇鸞大師は「ろうけんぜんじょう勞謙善讓」という言葉で言い表しておられます。こういう字を書きます。「勞」は苦勞の勞、「謙」は謙虚の謙、へりくだること、「善讓」は、善く譲ると書きます。自分は身を削って苦勞されながら、「お前ら、ちょっとは私の苦勞のことを考えろ」なんていう要求は一切せずに、黙ってへりくだって、むしろその苦勞の成果を人に譲って、その人をほめたたえられる。法蔵菩薩はそういう菩薩さまであると。

皆さん方の誰の中にもおられるのですよ。私どもの苦しみを全身に荷って、私どもを久遠の昔から、ずうっと支え続けて、しかもその苦勞を少しも主張せずに、黙って耐え忍んで、かえって私どもを、「あなたは本当に苦勞しておられる。その苦勞をみると私は頭がさがる。ご苦勞さま、ご苦勞さま」と言って、私どもに手を合わせておられる。それが法蔵菩薩です。

私どもの体で譬えれば、そういう法蔵菩薩の働きをしている所はどこでしょうか。顔や胴体や手や足は目立ちますね。でも一番目立たずに私どもの全身を支えている所はどこでしょうか。見当がつきませんか。足の裏です。私どもは、足の裏の事なんかすっかり忘れていますね。皆さんは、今日出かける前に顔を鏡でしげしげ見られたでしょう。でも足の裏をしげしげと見られましたか。おそらく足の裏の事なんか、思い浮かぶこともなかったでしょう。私どもが足の裏をしげしげと見るのは、足に水虫ができた時位ですね。でもその足の裏が、地面と接して私どもの五体を黙って支えてくれているのです。だからこそ、私どもは立って歩くことができるのです。ですから、曾我量深先生は、「私どもは、法蔵菩薩のお頭つむりの上に立っているようなもんだ。もったいないことだ」と言っておられました。

## 法蔵菩薩は今どこで修業中か

ところで、その法蔵菩薩ですが、菩薩というのはインドの言葉で修行者のことです。人々の救われる世界を求めて修行する人のことです。その菩薩の修業が完成した時に仏となるのです。では法蔵菩薩は、その修業が完成した時、何という

仏になられたのでしょうか。どうですか。それもご存じない？私どもの御本尊である阿弥陀仏になられたのです。

真宗の根本聖典は『仏説無量寿経』です。この『無量寿経』に法蔵菩薩の物語が説かれているのです。はるか昔のこと、世自在王仏と名告られる一人の仏（覚者）がおられました。『正信偈』に「在世自在王仏所」とあるでしょう。あの世自在王仏です。その世に一人の国王がおられました。その国王が、ある時その世自在王仏の説法を聞いて、心に悦びを感じて、私もあのような安らかな心を得たいという願いを發して、国王の位を惜しげもなくすてて、一人の修行者となられた。その名を法蔵と名告られました。非常に聡明で、意志が強く、慈悲心と実行力を兼ね備えた修行者でした。その法蔵比丘は、あらゆる人々のあらゆる悲しみや苦しみの経験を悉く觀見して（ご覧になって）——『正信偈』に「觀見諸仏淨土因 国土人天之善惡」とありますね。あの觀見です——そのくるしみや悲しみを悉く自らに引き受けて、「そのために自分は最後まで報われることなく終わったとしても、決して私は後悔することはありません」と誓われました。そして、心に怯えを抱いて生きている一切の人々が—法蔵菩薩の眼からご覧になれば、一切の人々は、その人が意識するとしなにかかわらず、皆心の底に怯えを抱えて生きているということになるのですが—心安らぎ満足できる世界を建立したいというとても大願を發して、五劫という気の遠くなるような長い時間をかけて修行されました。そしてその修業はすでに完成して、法蔵菩薩は阿弥陀仏と名告る仏になられています。またその国は安樂淨土と名付けられています。このように『無量寿経』に説かれています。

ところが、法蔵菩薩は修業が完成して阿弥陀仏となられると、そこで腰を下ろす間もなく、すぐにまた法蔵菩薩に帰られて、兆載永劫のご修行に再び入れられたのです。兆載永劫というのは、未来永劫、これで終りということがないということです。ということは、法蔵菩薩は、今も現に修業中ということになります。ではいったいどこで修業されているのでしょうか。どうでしょうか。そんなことを聞かれても、見当がつかないという顔をされていますね。

実は、皆様方お一人お一人と身一つにして修業されているのです。それを「同体の大悲」といいます。こういう字を書きます。体を同じにする大悲ということです。親鸞聖人はそのことを、「よろずの衆生ごとにとわかつころなり」（真宗大谷派『真宗聖典』五四七頁）とおっしゃっておられます。「よろずの衆

生ごとに」ですから、ありとあらゆる衆生ごとに、ということです。衆生の宿業は千差万別です。一人として同じ宿業の人はいません。その業が違う衆生を、一人の阿弥陀さんが十把一からげにまとめて助けるというわけにはいきません。そこで、阿弥陀さんは、阿弥陀さんの座を降りられて、それぞれの業を生きるよろずの衆生ごとにと分れて、身一つにして修業しておられるのです。喜びも悲しみも、運命を共にされているということです。ですから、今ここに五十人の方々がおられれば、五十体の法蔵菩薩がおられて、今現に修業されているということになります。そんなこと皆さん考えたこともないでしょう。「灯台元暗し」という言葉がありますが、あまりにも近すぎてかえってわからないのです。

以前、大分組夏期講習会の講師としてお見えになったことがあります小林光麿先生からこんなお話をお聞きしたことがあります。小林先生がまだお若い頃のことです。おばあさんが大事な入れ歯を失くされました。それで家中みんなで手分けして探したのだそうです。でもどうしても見つからない。それで一旦探すのを止めよう。「探すのをやめた時 見つかる事もよくある話で」と井上陽水の歌にもある通りです。で、夕食の時間になった。するとおばあさん、ちゃんと食事を始めたではありませんか。みんなびっくりして、「あれっ、おばあさん入れ歯見つかったんやね。よかったね。あれだけみんで探しても見つからなかったのに、いったいどこにあったの？」と聞いた。するとおばあさん、何と言ったと思いますか。がくと頭をたれて「すまんすまん、口の中にいれとった」と言った。みんな一斉に「えっ、何ですって！ おばあさん、それはあんまりではないですか。口の中に入れとって、いくら外を探したって、あるはずないじゃありませんか」と言った。おばあさんは、「すまんすまん、ごめんなさい」と平謝りだったそうです。

小林先生は言われました。「これと同じです。法蔵菩薩は。私たちが救いを求めている姿も」と。救いを外に求めて、一生懸命に高塚さんに行ったり神社仏閣にお参りしたりしている。また、阿弥陀さんを向うに拝んで「お願いします」と手を合わせています。でも法蔵菩薩はそういう私たちの足元で、私たちと身一つにして、私たちがどんな苦しい状況になっても決して捨てずに、私たちの存在全体を受け止めているのです。でもあんまり近すぎるために、私たちは一向に気付かずにいるのです。

## 苦悩の方が人間よりも大きい

先ほど、「われら」というのは、「ら」をわれとすることだという金子先生の言葉を紹介しました。また「ら」は身をあらわすという佐野先生の言葉も紹介しま



した。身とは宿業の身のことですね。つまり「われら」とは、宿業の身をわれと  
するということです。それは、まさに法蔵菩薩のことですね。ですから「われら」  
という言葉は、法蔵菩薩の名告りなのです。どこで名告っているかという、外  
からではなくて、今言いましたように、われらのこの宿業の身から名告っている  
のです。つまり法蔵菩薩とは、われらの宿業の身の魂のことなのです

そうであれば、「生死の苦海」と「弥陀弘誓のふね」とが二つ別々にあるので  
はないですね。ちょっと考えると、生死の苦海があって、その海の上に弥陀弘誓  
のふねが浮かんでいて、船の上から阿弥陀さんが、あっぷあっぷしている私ども  
を引っ張り上げて乗せて行ってくれと、何かそんなふうなイメージを思い浮  
かべてしまいがちですが、そんなことではなかったのです。生死の苦海の全体が、  
そのまま法蔵菩薩の体だったのです。それを「弘誓のふね」と言うのです。お師  
匠さんは、そういうことに気づかせていただいて、お念仏の声が口をついて出た  
のでしょう。

先ほど「悩みのるつぼ」のことを取り上げましたが、私たちは、生まれてから  
死ぬまで様々の事で悩みます。正に人生は「悩みのるつぼ」です。そういう悩み  
にぶつかりますと、私たちは、それを何とか解決したり克服したりしようとしま  
すね。でも、それで解決のつく問題はまだ浅いといえます。この世の中には、解  
決のつかない問題の方が圧倒的に多いのです。そういう解決のつかぬ問題にぶ  
つかりますと、私たちは、ただ立ちすくむしかありません。

そういうことを考えますと、人間が苦悩を抱えているというよりも、苦悩の方  
が人間よりもはるかに大きいのです。法蔵菩薩は、そういう私たちを「われら苦  
悩の衆生よ」と呼びかけてきます。「生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめる  
われらをば」というのは、そういう呼びかけの言葉です。法蔵菩薩の名告りの言  
葉です。その呼びかけによって、始めて私どもは、すでに法蔵菩薩によって「苦  
悩の衆生」として根本的に受け止められ、「ご苦労さま」と手を合わせられてい  
る存在であったことに目覚めるのです。そして、安んじて生死の身に帰り、法蔵  
菩薩から呼ばれている苦悩の衆生として出発していくことができるのです。「わ  
れら」というのは、そういう法蔵菩薩の呼びかけの声でもあるし、また呼びかけ  
られて法蔵魂に立ち上がった声でもあるのです。

私は、色々と不安や孤独や虚しさを抱えた人間であり、息を引き取るまでそう  
であると教えられています。宿業の様々な出来事を通して、命ある限りこの法  
蔵魂の呼びかけをいただいこう、そういう大切な時間を生きていこうと、そ  
ういうふうに思っています。